

KONAN UNIVERSITY

# 研究活動報告 二〇一一年度アートグループ活動報告

著者	内藤 あかね
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	13
ページ	159-161
発行年	2012-02-29
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00002743">http://doi.org/10.14990/00002743</a>

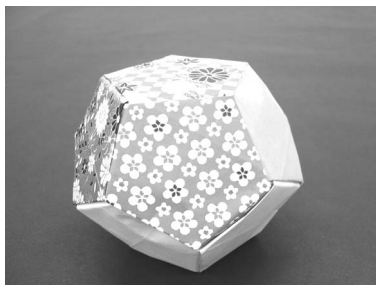
## 二〇一一年度アートグループ活動報告

今年で十一年目を迎えるアートグループは、例年どおり第二・第四木曜日の午後に前期・後期とも八回ずつ、計十二回開催された。ファシリテーターの筆者と講師の椋田三佳氏とが共同で運営するグループ活動で、一回ごとに異なる課題に基づいてアート制作を行う。今年は長年継続参加しているメンバーに加え、新規に一名メンバーが増え、グループを長らく休んでいたメンバーが、一度顔を出されることもあった。見学にも数名来られた。以下に、今年の活動で特徴のあった点をいくつかまとめて報告する。

### 一、新しい課題の取り入れ

#### ① 多面体おりがみ

一般的に使われるものよりしっかりした紙質の折り紙（色紙・和紙）を使って、多面体を制作する課題を行った。折り方に精度が求められるので全員時間をかけ集中して折り続け、メンバーから「疲れたー」という声上がるほどだった。筆者は個人制作として正十二面体を色紙と和紙を混ぜて作ってみた。十二枚



感じた。個人制作に加えて、各自で「レンガ」を作って最後と一緒に並べてもみた。一人でたくさん作ることではなくても共同で積み上げれば予想外の形ができて面白い。グループワークの醍醐味であろう。

#### ② キャンドル

パラフィン（ろう）を湯煎で溶かし、染料（専用の物以外にクレパスを削った物を使用）を入れてかき混ぜ型に流し込んでミニ・キャンドルを作った。家庭用卓上コンロとはいえ、ガスの火を用いて蠟を溶かし固めるのはワクワク感のある作業だったようで、メンバーの一人は「久しぶりに興奮しました」と喜んでコメント

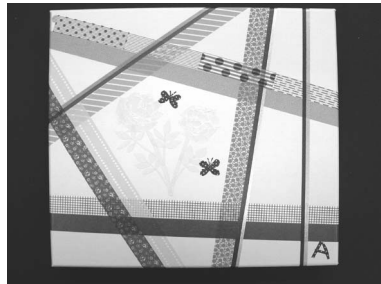
すべて違う色と模様を選んで同じ形のパーツに折り、組み合わせで作ったのだが、きちんと折れたときのすっきりとした満足感と、出来上がりが想像できるようなでできない難しさとが印象に残った。参考にした文献の副題に「考える頭をつくろう!」と書いてあるとおり、普段の生活とは異なる頭の使い方をしたようで、一見創造性に欠けるこのような試みも面白いと感じた。



トしてくれた。アロマ素材としてポプリや香り付きの染料を蠟に混ぜることで芳香を楽しむこともできた。アート制作は五感を刺激し活性化する上で意義のある行為だが、嗅覚に訴える課題というのは少ないので、その点でもよい課題だったと思う。

### ③ マスキングテープ

最近、文房具や手芸の店できれいな色や模様のマスキングテープを見かけることが多くなった。グループでも流行の素材を使ってみようということになり、空き箱やクラフト紙の封筒などに装飾を施す方法が案として提示された。こう書くと「誰でもできる手軽な工作」という印象だが、一つの箱や封筒のどこにど



う貼るかという位置取りの問題、柄と柄を組み合わせたり何かの形にカットしたりというデザインの問題があり、その辺りに制作者の個性が反映する。メンバーの作品には、普段の描画と同じ趣ながらマスキングテープという素材の特性をうまく生かして大判の封筒にコラージュを施したものがあった。「こんな封筒で本を贈ったりしたら素敵ですね」と筆者はコメントした。実際に使用するかどうかは別として、ギフトボックスや封筒をデザインすることによってコミュニケーションが想像できるのも意味のあることであろう。

## 二、広報について

### ↳アートセラピー・ワークショップ開催↳

ここ数年、アートグループの活動上問題になっているのは新規メンバーが増えないことである。見学者はあっても、メンバーになって参加するに至らないケースが多く、カウンセリングダムにおいてアートグループやアートセラピーを行っていることを地域の人知って頂く機会を増やしていく必要があった。今年三月に椋田さんを講師に招いて、K I H S主催のアートセラピー・ワークショップ『認知症ケアのためのアート2 和紙を使ったアートセラピーの実践』、一月には四天王寺大学の今井真理先生にお願いして『認知症ケアのためのアート3 アート回想法の体験型ワークショップ』を行い、アートセラピーに関心のある専門家・市民に向けて行った。アートグループそのものを宣伝するのではなくても、このようなワークショップに参加してくださる方と直接話し、当ルームでの活動を紹介することで地道に宣伝していく方略である。今年は社会復帰後長く参加を休まれているメンバーの一人が「久しぶりにアートをしたいくなったので来ていいですか？」と参加してくれたり、新しいメンバーが一名増えたりと前進があったので、今後も粘り強く活動を展開していきたいと考えている。

(内藤あかね)